

高校家庭科の学力（資質・能力）向上に向けた 授業実践報告

齋 藤 和 可 子

〈キーワード〉 家庭科教育学 生活リテラシー 課題解決能力 消費者市民性 授業研究

1. 研究の背景と目的

新学習指導要領改定の基本的な方向性や考え方を示す中央教育審議会の答申によると、2030年の未来に向けて子ども達に育てたい生きる力として様々な内容が明示されている。その中の1つは、変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができる¹⁾と述べられている。また、OECDが示した「キーコンピテンシー」、国立教育政策研究所が示した「21世紀型能力」など、これらはいずれも未来を創るために市民性が重視され、協調性と問題解決能力の重要性が挙げられている。現在、このような能力の育成に向け、学校教育で何を学ぶか、それがどのような資質・能力を育むかを明確化し、教育課程の中で計画的・体系的に育んでいくことが求められている。

家庭科では、生涯を通してより良い生活を送るために生活や社会における問題を自ら発見し解決する課題解決の力の育成を目指しており、市民性を養う教科であると言える。これまで、家庭科教育学会などでも、「自立」や「未来を創る力」の育成に取り組んできている²⁾が、これらの整理し家庭科の授業とのかかわりを明らかにすることで、より効果的な授業づくりができると考えた。

そこで本研究では、高校家庭科で育成している学力（資質・能力）とはどのようなものを整理し、高校生の育成状況を調査することとした。またその中で、高校家庭科の授業を通してどのような力を獲得できているか、実証的に検証することとした。この報告は、高校家庭科で育てる学力（資質・能力）の検討と育成状況に関する調査をふまえ、高校家庭科の学力を向上させることを目的に行った授業実践報告である。この取組みを通して発見した生徒の実態や課題点などを考察する。

なお今回の報告は、日本家庭科教育学会課題研究グループでの「高校家庭科の学力（資質・能力）の育成状況に関する調査・実証研究」を授業実践者の視点でまとめたものである。

2. 研究内容

(1) 質問紙調査について

中央大学附属高等学校高校1・2年生664名、高校3年生121名、合計785名に質問紙調査をした。また、課題研究グループメンバーが所属する他の高等学校4校においても同様に調査を行った。全合計人数は、2477名で、完全回答者は2207名であった。有効回答率は、89.1%である。

質問項目は、生活リテラシーに関する内容と、高校生が家庭科で取得する知識・技能の習得状況について、そして健康状態や学校生活に対する意識、家庭科観、お手伝いの実施状況、自分の将来に対する考え方についての項目である。生活リテラシーについては、先行研究である家庭科教育学会が実施した「家庭科未来プロジェクト」2016年調査の調査項目に「課題解決」「消費者市民」の項目を加えた。また、生活スキルについて調査した国立青年教育振興機構の平成27年度実施「子供の生活力に関する実態調査」の内容を参考に項目を作成した。

質問紙調査は、2019年4～5月にホームルームまたは学校設定科目教養総合Ⅱの授業時間内に実施した。その際、クラス担任、または授業者が生徒に対して評価には全く関わらないことを伝え、マークシート形式の無記名で行った。

(2) 質問紙調査結果 生徒の実態

生活リテラシーに関する質問項目は、『自立』についての分類として、「食生活」、「衣生活」、「住生活」、「時間管理」、「金銭管理」をそれぞれ2項目ずつ設定した。その他、『共生』、『課題解決』として3項目ずつ、『消費者市民』として2項目、合計18項目とした。この調査結果は、表の1に示した通りである。調査結果で、「いつもする」「時々する」の肯定的な回答の割合が50%に満たない項目は、「包丁やフライパンなどを使って食事を作る」43.7%、「ボタンが取れた時に、自分でボタンをつける」39.4%、「商品を選ぶときは、品質表示を確認する」44.6%、「商品を選ぶときは、環境や作り手のことを考える」44.9%の4項目であった。これらの項目は特に、「いつもする」と答えた割合が低いことも特徴的であった。

生活リテラシーについて、男女比較では多くの項目で有意差があった。男女で有意差が見られなかった項目は、「生活時間や生活リズムを自分でコントロールしている」「お金を計画的に使う」「目標を達成するために計画的に行動している」「1つの方法がうまくいかなかつたとき、別の方法でやってみる」「電気や水を使いすぎないようにしている」「商品を選ぶときは、環境や作り手のことを考える」であった。男女で有意差があり、ほぼ全ての項目で女子の生活リテラシーが有意に高い結果となった。そのため、男女別に総合平均点よりも高い群と低い群に分け、他の項目と掛け合わせ関連を調べた。男女とも生活リテラシーが低い群は、「物事に集中できない」「何もやる気がしない」の項目が有意に高い結果となった。また、

男女とも生活リテラシーが高い群は、「学校生活が充実している」「勉強が得意な方だ」に対する肯定的な回答が有意に高い結果となった。将来に対する考え方についても、「結婚したい」「子どもを持ちたい」に対する肯定的な回答が有意に高い結果となった。

次に、家庭科で習得する知識・技能に関する質問項目についてである。高校家庭科で学ぶ大きく10項目の内容に対して、それぞれ1～3個の質問を設定した。質問項目の選定においては、食生活、衣生活、住生活、保育などだけでなく、生活設計や社会参画・消費者市民性など、家庭科の学習範囲の幅広さを改めて認識できた。ここでの結果は、表2に示した通りである。調査結果で、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の肯定的な回答の割合が50%に満たない項目は、「栄養を考えた献立を考えることができる」43.3%、「料理に応じた食材の切り方ができる」48.4%、「服は、色や素材に応じた選択ができる」「生活を支える社会保障制度がわかる」35.8%、「エシカル消費がわかる」9.5%であった。これらの学習内容は、特に食生活や衣生活に関わる項目については小中学生から実施しているものであるが、生活の中で自分が中心となって行うわけではないためか、低い実態であった。社会保障制度や、エシカル消費についてはより効果的に学習を行う必要があると考えられる。

そして、家庭科の知識・技術の習得状況の男女比較については、「災害に備えて家具の配置や対策を工夫できる」「高齢期におけるからだの変化が分かる」「課題解決のために、情報を収集し、有効なものを判断し活用できる」「家庭生活に関わる社会問題が分かる」「環境や社会に配慮した消費行動ができる」の5項目を除いた、15項目で有意差が見られた。そのうち、男子の方が有意に高い項目は、「生活を支える社会保障制度が分かる」「エシカル消費が分かる」の2項目であったが、それ以外の13項目は女子の方が有意に高い結果となった。そのため、家庭科の知識・技能の習得状況に関する項目においても、男女別に総合平均点より高い群と低い群に分け、他の質問内容との関連を検証した。家庭科の知識・技能の習得状況と生活リテラシーとの関連については、習得状況が高い群は男女ともに生活リテラシーが有意に高い結果となった。このことから、家庭科で習得する知識・技能をしっかりと身に付けることにより、生活リテラシーも高めることにつながると考えられる。そして、生活リテラシーが高いことにより、よりよい生活を送ることにつながると考えられた。

調査により生活リテラシー、家庭科の知識・技能共に男女で有意差が見られたことはあまり良い結果とは言えないが、それぞれ関連性が見られたことは大きな成果と言える。

男女の差、家庭科の知識・技能の習得状況で著しく低かった項目、これらの実態を把握したうえで授業づくりに生かし改善を図りたいと考える。

表1 生活リテラシーの質問項目と高校生の実態

(n = 2207) %

要素	質問項目	いつもする	時々する	あまりしない	しない
自立	食生活 包丁やフライパンなどを使って食事を作る	6.8	36.9	31.6	24.7
	食事は栄養バランスを考えて食べる	23.7	42.0	26.6	7.6
	衣生活 ボタンが取れた時に、自分でボタンをつける	17.4	22.0	27.3	33.3
		68.1	23.7	6.1	2.2
	住生活 健康のため、部屋の換気をしている	24.6	44.1	25.4	5.9
		27.5	47.0	20.7	4.8
	時間管理 遅刻しないで学校に行く	81.1	13.7	3.8	1.4
		24.9	42.0	26.0	7.1
	金銭管理 お金を計画的に使う	33.1	42.3	20.3	4.3
	商品を選ぶときは、品質表示を確認する	16.9	28.7	33.1	21.3
共生	近隣の人との住まい方のルールやマナーを守って生活する	69.9	24.0	4.8	1.4
	バスや電車でお年寄りや体の不自由な人がいたら席を譲る	40.6	43.2	13.2	3.0
	自分と違う意見や考えを、受け入れる	47.6	47.1	4.7	0.6
課題解決	目標を達成するために計画的に行動している	14.5	45.0	34.2	6.3
	1つの方法がうまくいかなかったとき、別の方でやってみる	32.6	53.1	13.0	1.3
	インターネットの情報が正しいかどうか考えるようとしている	46.4	42.5	9.6	1.5
消費者市民	電気や水を使いすぎないようにしている	31.9	45.7	19.6	2.9
	商品を選ぶときは、環境や作り手のことを考える	10.2	34.7	39.4	15.7

表2 家庭科で習得する知識・技能の質問項目と高校生の実態

(n = 2207) %

内容	質問項目	あてはまる	どちらかといえどあてはまる	どちらかといえどあてはまらない	あてはまらない
食生活	栄養を考えた献立を考えることができる	10.4	32.9	40.8	15.9
	料理に応じた食材の切り方ができる	15.0	33.4	33.8	17.7
	和食の特徴がわかる	21.5	49.8	24.1	4.6
衣生活	服は、色や素材に応じた選択ができる	13.1	30.2	38.7	17.9
	予算や季節、用途を考えて衣服の購入ができる	35.4	44.0	15.2	5.3
住生活	災害に備えて、家具の配置や対策を工夫できる	12.3	39.3	38.9	9.6
	平面図を見てどのような住宅か想像できる	19.4	34.3	31.3	15.0

ジェンダー	性別にかかわらず、社会的にも生活的にも自立する必要性がわかる	45.8	44.0	8.8	1.4
保育	親の役割や責任がわかる	37.9	51.1	9.7	1.3
	乳幼児の心身の発達の特徴がわかる	13.1	41.8	34.6	10.5
高齢福祉	高齢期における体の変化がわかる	13.8	41.8	34.1	10.3
	バリアフリーやユニバーサルデザインがわかる	28.9	48.5	18.0	4.6
生活設計	将来起こりうるリスクを想定できる	15.0	44.0	33.3	7.6
	生活を支える社会保障制度がわかる	6.8	29.0	45.7	18.6
意思決定	課題解決のために、情報を収集し、有効なものを判断活用できる	17.3	52.7	26.6	3.4
消費生活	電子マネーやキャッシュレスのしくみがわかる	17.5	38.5	33.0	10.9
	ネットショッピングや通販のトラブル予防や対処の方法がわかる	15.4	38.2	36.7	9.7
社会参画・消費者市民	家庭生活に関わる社会的問題が分かる	10.3	40.1	40.9	8.7
	エシカル消費がわかる	1.9	7.6	19.5	71.0
	環境や社会に配慮した消費行動ができる	12.5	45.2	34.8	7.6

3. 授業実践について

実態調査で著しく知識・技能の結果が低かった項目、消費者市民性に関する「エシカル消費」に関する知識・技能の向上を目指し、授業計画を作成した。「エシカル消費が分かる」という質問項目について、あてはまらないと回答した生徒は、71.9%であった。エシカル消費については、比較的新しい概念で、授業でまだ取り扱っていない学校も多いのが現状である。そのため、消費者市民性を高める学習を取り入れ、エシカル消費をテーマとした授業設計を考えることとした。高校家庭科では「よりよい社会の構築」を目指していることから、消費者市民に加え、課題解決、協働などをキーワードに活動内容を工夫した。自ら課題を発見し解決を目指す問題解決型学習や、生徒が主体的に学ぶことを意識したグループでの学習を意図的に多く取り入れた。

なお、授業対象生徒には授業開始時の段階と、6時間終えた後の授業終了段階での実態調査を行い、授業の効果を検証することとした。

(1) 実施時期 2019年9月～10月

(2) 対象者 教養総合Ⅱ 体験的に学ぶ生活文化学選択3クラス 121名

(3) 授業計画

授業時数	授業内容	学習形態など
1	消費者すごろくの実施	グループ活動
2	4者の視点で関係性を考える	発表
3	DVD「THE TRUE COST」視聴	映像視聴・説明
4	すごろくやDVDでの問題点の構造化	グループ活動・発表
5	消費を巡る問題についてテーマを決め、まとめる	グループ活動
6	発表会	発表

①1・2時限目について

授業開始時には、自らの消費行動を振り返る活動、また消費者市民（エシカル消費）や課題解決に関する知識・技能などを問うアンケートを実施した。自らの消費行動を振り返る活動では、自分が今着ている服について考えさせ、「誰がデザインしたか」「どこで作っているか」「誰が作っているか」など自分の服に携わる人々について知らない状態で服を着ていることを意識させた。その後実施した消費者すごろくは、「A 生産者」「B 製造者」「C 販売者」「D 消費者」に役割を分担し、すごろくのゲームを行った。この消費者すごろくは、各マスに様々なアクシデントやイベントがあり、それぞれの立場で影響を受けるため、それぞれの関係性がゲームを通して理解できる仕組みとなっている。

その後、席を移動し、役割ごとに集まってそれぞれの立場で感じた問題点や4者の関係性について話し合った。4者の関係性については、役割ごとのグループで、図などを用いて表現し、発表した。

②3・4時限目について

1・2時限目に実施した消費者すごろくでの4者の関係性や問題点を振り返り、ドキュメンタリー映画「THE TRUE COST」の冒頭30分を視聴した。この映画は、2013年にバングラディッシュで起こった縫製工場の入った商業ビル崩壊事故や、衣服の原材料である綿の生産現場、ファストファッションなど安さを求める消費者、フェアトレードに取り組む企業などの現状を描いている。この映画視聴後、映画に関連する内容の日本のデータの資料をいくつか確認した。その後、これらをふまえ問題だと思った点について各自付箋に書きだした。この付箋を用いてグループごとにKJ法を用いたグループワークをし、意見をまとめ、発表した。

(3) 5・6 時限目について

これまでの内容をふまえ、消費を巡る問題点についてどの点についてより深く学びたいか各自に考えさせた。その後、グループで意見を出し合いながらテーマを決め、発表に向けての準備を行った。テーマ決めの際は、班ごとにテーマが重複しないように決めた。また、発表は、プレゼンテーションソフト、模造紙、紙芝居、動画など各班の好きな方法で行った。

授業終了後には、1・2 時限目の始めに行ったものと同様の内容のアンケートを実施した。
(消費者市民（エシカル消費）や課題解決に関する知識・技能などを問うもの)

(4) 生徒の様子と授業の考察

① 1・2 時限目～消費者すごろく～

消費者すごろくの活動では、グループごとに楽しんで取り組む様子が見られた。とまったくマスでは、トラブルや生活費の徴収、給料日などがあり、4者（生産者、製造者、販売者、消費者）の立場で支払のポイントや貰えるポイントが異なる。チャンスカードを引くと消費に関するクイズに答えることになり、班での学びも深まっていった。一部、ルールの捉え方があいまいで独自のルールで行ってしまう班もあったためより明確にルールなどに注意点を説明する必要があった。

すごろくの実施後、4者の関係性を話し合う際には、話し合いが盛り上がっている班が多くかった。それぞれの役割で集まったため、その立場で感じた問題などについて実感を伴って話しあっていた。4者の関係性については、同じような意見になるかと思われたが、経験した立場によって違いが見られた。例えば、生産者の給与の低さ、生産者の子どもに対する懸念、消費者の身勝手な行動などの意見が多く出た。

<生徒によるワークシートの記述例>

- ・消費者の消費の仕方が他への影響が大きい。（バーゲンで安く買えば、3者にとって利益を削っての在庫処分となる）
- ・消費者の需要によって販売者の収入が左右される
- ・何やかんやで需要があるとすると、B（製造者）とC（販売者）は儲けられる。災害などの影響も受けない。しかしA（生産者）やD（消費者）は普段の消費状況に左右されるので赤字。消費者はうまくいければ、プラスになるが全てに巻き込まれるのが難点だと思った。
- ・生産者はみんなに必要とされている（需要がある）のに給料が低い
- ・最初からもっているお金が少ないので生活を変えられない。そのため、貧困が継続する。
- ・消費者が3R カードでリサイクルすれば生産者・製造者の利益が増える。
- ・A（生産者）B（製造者）C（販売者）はどれも売り手側→自分の意志に關係なく利益・損害が生じる

②3・4時限目～THE TRUE COST 視聴～

DVDの視聴は30分程度であった。ただし日本語の音声ではなく字幕だったためか集中度は個人差があった。ワークシートにメモを取る生徒もいたが、多くは字幕を確認するため視聴を優先していた。

DVD視聴後、1人6～8枚程度、付箋へ問題点を記入させた。多くの生徒は素早く付箋を記入し、話し合いに入っていた。生徒によつては、細かく内容を記入しすぎており話し合いの際に意見を全て言えていないような場面もあった。話し合いの際の注意点として、意見の似ているものなどで分類すること、分類した者同士の関係性もあれば書き加えること、分類した内容がすぐに分かるようにタイトルをつけることなどを伝えた。ただし、話し合い時間があまりとれず（13分程度）、カテゴリライズやまとめに至らない班もあったことが課題であった。発表は、4班程度実施し、特に多かった意見や特徴的なまとめ方、関係性などを中心に報告してもらった。

＜発表で挙げられた問題点＞

- ・製造者の労働組合が機能していないこと。労働組合を作ったが暴力を受けていた。
- ・低賃金で長時間労働を強いられていること。
- ・遺伝子組み換えコットン生産により、種子と殺虫剤の購入で借金せざるを得ないこと。
- ・殺虫剤が多く使われていることで、生産者の健康を害すだけでなく、将来、その土地が使えなくなってしまう可能性があること。
- ・労働者の命を顧みない大企業の体制
- ・低価格主義や大量生産
- ・アパレル産業に多くの人が携わっていることに気付いていないこと

③5・6時限目～グループごとの発表～

これまでの学習を振り返り、気になるものを列挙させ、テーマを設定させた。その後、班ごとの話し合いを経て何についてより深く調べ、まとめ、そしてどんな解決策とするか考えさせた。月曜に実施したクラスは、時間数の関係で個人のテーマを設定する時間は取らず、すぐに班ごとのテーマ決めとした。また、授業間隔があくため宿題として生徒間で分担しながら取り組んできもらった。

発表の際は、異なるテーマについても学び、評価できるようワークシートを工夫した。準備や発表に対して真剣に取り組む様子が見られた。

<発表テーマ例>

- ・低賃金労働者とフェアトレード
- ・ファストファッションの裏側
- ・労働弱者と教育問題
- ・発展途上国の労働問題
- ・日本の労働環境
- ・フードロス
- ・労働者を思いやる消費をするには
- ・フェアトレード商品について
- ・コーヒー豆から見る労働環境問題とその解決策
- ・種子独占の問題点
- ・Btコットンがもたらす影響

4. 授業分析と振り返り

全6時間の授業を終え、ワークシートへの記述内容をもとにどのような変化が見られたか分析を行った。まず、アンケート結果についてである。事前の実態調査で知識・技能の習得状況が著しく低かった「エシカル消費が分かる」とそれに関連する『消費者市民』についての項目を比較した。表3のように、平均点で比較した場合、4項目全てにおいて授業後が有意に高い結果となった。ただし、表に示した通り平均点は2.5点前後の項目が多くまだ知識・技能が高いとは言えない状況でもあることが課題として残る。生徒一人一人でみると、依然として「あてはまらない」「あまりあてはまらない」を選択している者も多く、全員の知識・技能が高まる結果となるようより工夫も必要と言える。次に、『課題解決』に関する項目についてである。今回の授業計画において、個人での課題発見の後、グループでの話し合い、発表を繰り返し何度も実施した。このような学び方の工夫での成果として、課題解決に関する内容の2項目で授業前との有意差が見られた。課題を見つけ、解決する活動を繰り返し行うことで、自分の生活の中や、他の学習においても活用できる力を得ることができると考えられる。今後も効果的に授業に取り入れていきたい。

そして、授業前と授業後に「消費者の責任」とはどのようなものかを自由記述させたものを比較した。全ての生徒の内容を載せることはできないが、以下のように変化が見られる生徒がほとんどであった。消費者として、何の責任もないように感じていた生徒も、自分たちの行動で生産者・製造者・販売者を苦しめることになることなどが実感を伴って理解できたようである。この感覚を生活の中でも忘れず、生かしてくれることを期待したい。

最後に、授業を通しての自由記述についてである。この内容は、授業者にとっても身につ

まされる内容が多く書かれており授業を振り返るうえで非常に参考になった。例えば、ある生徒は、「自分と密接に関わっているのに、こんなにも知らなかつたことも驚きでした。すがろくをやっていた時には見えていなかつたものが今は見えていると思います。」という感想を述べていた。新しく知った知識は、本来知つたうえで生活すべきだったことでその知識が生活と直結していると気づいたようである。また、別の生徒は「今回初めてエシカルファッショントイで聞き、エシカル消費に興味がわいた。ファンションに興味があるのでより深く学びたいと思った。」というように新しく学んだ概念を通して、自分のできることを模索する様子や新たな学習への興味関心が窺える。これらは、生徒の学びへの探求心や満足感なども垣間見ることができ、これらの生徒にとっては今回の授業が効果的であったと言えるのではないだろうか。全ての生徒に対して、十分な理解や問題意識を共有することは困難ではあるが、今回の授業実践から少しでも生徒の心に響くものがあると願っている。そして、生徒自ら自分の生活の中で実践し、課題を解決する姿勢が見られることを期待したい。

表3 消費者市民、課題解決に関する知識・技能活用力の事前事後比較

平均点（4点満点）

	質問項目	事前	事後	検定
消費者市民	エシカル消費がわかる	1.12	2.43	***
	環境や社会に配慮した消費行動ができる	2.03	2.67	***
	商品を選ぶときは、品質表示を確認する	1.82	2.45	***
	商品を選ぶときは、環境や作り手のことを考える	1.56	2.14	***
課題解決	課題解決のために、情報を収集し、有効なものを判断し活用できる	2.98	3.11	—
	目標を達成するために計画的に行動している	2.56	2.78	**
	一つの方法がうまくいかなかったとき、別の方でやってみる	3.05	3.10	—
	インターネットの情報が正しいかどうか考へるようにしている	3.15	3.39	**
総合平均		2.28	2.76	***

<消費者の責任とは何か自由記述 事前・事後比較>

生徒 A 事前：お金を払うこと

事後：何を選んで買うかは消費者の自由だと思うが、それによってどのようなことが起こるのか、商品の作られた拝見をしっかり知ったうえで選択して消費することが重要と考える。

生徒 B 事前：環境について考えること

事後：単に安さを追求するのではなく、商品が生産された裏側を考える責任、苦しい生産者を助ける方法を探す必要がある。

生徒 C 事前：資産の多い人はお金を貯めこみ過ぎず、どんどん消費行動をして経済を回すようにする。少ない人は浪費を避ける。

事後：自分たちの消費を優先するだけではなく、その消費が生産者や企業、環境や健康にどのような影響を及ぼすのか考えながら消費し、社会全体の利益になるようなものを目指すべきである。

生徒 D 事前：値段以外の原産地などもよく見て選ぶ。

事後：生産者のことを考える。「消費」しすぎない。商品だけでなく、生産者の「命」も消費している。エシカル消費を心がけるようにする。

生徒 E 事前：残さず食べる

事後：私たち消費者がフェアトレード商品を買ったり、賞味期限が少し過ぎた廃棄食品を買うなど、消費者の意識を変えるだけで、発展途上国の労働者に少し変わることがあると思った。

<授業後の自由記述内容>

- ・洋服は、想像をはるかに超えた人数の生活などを犠牲にして作られているんだなと思いました。本当に大切に大切に着ようと思いました。
- ・私たち消費者が無知であることが、様々な問題を生じさせているのではないかと感じた。生産があるから消費があり、消費があるから生産が成り立っている。私たち消費者は、生産者ことを考える必要がある。身近になっているSNSで拡散すれば自分の意識も変えることにも繋がるのではないかと思う。
- ・商品が安くなることの背景で、どんな犠牲が払われているか、考えたこともなかったし、興味を持ったこともなかった。学習の中で、自分の暮らしている国と違う暮らしへを見て、ショックだった。だからこそ、これからは関心を持っていきたいし、自分にできることを探していきたい。
- ・自分たちが求める安さの裏には、大きな犠牲がついていることが分かった。数百円多く払うだけで、何人かの命が救えるのならば、出し惜しむことなく多く払い、少しでも多く、お金とは比べ物にならない大切な命を救いたいと思った。
- ・本来知っておくべきだった知らないことを多く知ることができました。自分と密接に関わっているのに、こんなにも知らなかったことも驚きました。すがろくをやっていた時には見えていなかつたものが今は見えていると思います。
- ・今回初めてエシカルファッショについて聞き、エシカル消費に興味がわいた。ファッションに興味があるのでより深く学びたいと思った。プリントに紹介されていた大学生のように、自分のできることをして、人に影響を与えたいたいと思った。

5. まとめと今後の課題

実証授業を行うにあたり、高校家庭科の授業で育成すべき内容について考えを深めることができた。授業の分析の結果としては、概ね効果は認められたといえるが、まだまだ課題が残る結果となった。新学習指導要領でも「どのように学ぶか」について言及されているが、授業計画と指導方法や授業内容の重要性を再認識した。授業数の違いから、月曜日と木曜日のクラスで多く時間を費やす場面が異なった。また、時間数に限らず、授業者の声かけや生徒の親密度なども影響が大きいように感じた。今回は、授業観察者からの視点の分析は都合上入れなかつたが、クラスの雰囲気などの違いを感じているようだった。

日本家庭科教育学会で実施した、生活リテラシーの調査によると、日常生活における実践力・活用力の高い生徒は、自己理解や自尊感情が高く、ジェンダー平等の意識が高く、市民性、社会活動への意欲も高いという結果が出ている。³⁾そのため今回の授業実践など日々の家庭科の学習を充実させ、より生活においての実践力を高める工夫を行いたい。そして生徒のよりよい生き方につなげていきたい。

今後の課題として、2点挙げられる。まず、1点目は家庭科で習得する知識・技能の向上についてである。今回の授業は教養総合を活用し、授業を行った。しかし多くの場合、家庭基礎または家庭総合のみで高校の家庭科を修了する場合が多い。より効果的に知識・技能を身に付け活用できる力を育むために、家庭基礎または家庭総合の授業の充実も図る必要があると言える。

2点目は、他教科との連携や家庭科の系統的な学びである。今回の学習を通し、様々な教科での学びやこれまでの家庭科の学習が授業で活かされていることを感じた。生徒の発言やワークシートへの記入にも、これまで英語や国語、社会などの教科や高校2年時の教養総合Iでの学習、高1での家庭基礎や中学までの家庭科が生かされたという内容が記されていた。このように生徒自ら、学びをつなげることは自立的で素晴らしいことであるが、授業者側も意図的に関連している点を紹介する必要もあるであろう。様々な学習を通して、自分の生活の中で課題を見つけ、社会の中で解決に近づく行動をとれるようになることを期待したい。

今後もよりよい授業づくりを試み、生徒の可能性を広げられるよう日々改善したい。

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会（2015）初等中等教育分科会（第100回）配布資料 資料1 教育課程企画特別部会 論点整理『新しい学習指導要領等が目指す姿』
- 2) 日本家庭科教育員会特別研究委員会「家庭科未来プロジェクト」
- 3) 日本家庭科教育学会編（2019）『未来の生活をつくる 家庭科ではぐくむ生活リテラシー』
 - ・国立青少年教育振興機構「子供の生活力に関する実態調査～子供に必要な生活スキルとは～」（2015）
<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/96/File/gaiyou.pdf>
 - ・牧野カツコ監修、お茶の水女子大学附属学校家庭科教育会著（2017）『作る手が子どもたちを輝かす② アクティブラーニングが育てる「これからの家庭科』 地域教材社